

## 鶏頭に蝟螂図

伊藤若冲筆

桂州道倫賛

寺村容子氏蔵

絹本着色 一〇三・一×五五・五cm

〔図版二〕

所蔵者である寺村家は先祖に与謝蕪村の門人でもあり、庇護者でもあった寺村百池が出ており、そのために蕪村の主要な作品や重要な資料が襲蔵されていることで名高いが、ここではその陰に隠れてあまり知られることのなかった若冲の佳品を紹介することにした。

図を眼にした時にまず注目されるのは鋭角的に屈曲し、ねじれて一回転している奇矯な茎の形態である。そして、その茎の彩色法も変っている。紫と緑とがまるで墨流しのような効果をあげるように配色されている。(若冲には水墨による山水図に墨流しの効果を用いた作例もある)茎の先端には染みるように鮮やかな紅色と黄色の花冠が厚みをもった彩色法によって描かれているが、地に墨が刷かれているために深みのある色調となっている。そして、その頂には腹を脹らませた雌蝟螂が一匹、虚空に空しく斧をふりあげる後姿が描かれている。

落款は「米斗翁行年七十六歳画」の墨署と「藤如鈞印」(白文長方印)「若冲居士」(朱文単廓方印)の二印からなっている。落款に年齢を加えることはこの前年から多く見られるが、後者の印はあまり遺例をみない。これによって本図は晩年期の寛政三年(一七九一)作

と判明するが、若冲はその前年に西福寺の「仙人掌に群鶏図」(重要文化財)および海宝寺の「群鶏図」のような障壁面を描いているように、その創作意欲にはいささかの衰えも見られない。だが、蝟螂の後姿には若冲特有の諧虐性も認められようが、それ以上にこのさき行くあてのない老齢のもつさびしさが象徴されているように感じられる。

余白には次のような賛文が書かれている。

「紅飾鶏冠美

蝟螂愛未離

峨眉桂杜多題」

印は「悠情寄瑤山」の関防印と「桂州」「道倫之印」の印が捺されている。賛者は若冲と同世代の臨濟僧で、平安人物志にも書家として名を連ねており、余技に絵もよくした桂州道倫である。桂州和尚の父親については諸説あるが、法名は玉山友泉と言う。桂州和尚はおそらく幼時より出家したと思われるが、洛西地藏院の雲崖道岱に師事し、三十歳に見解偏を呈して認められ、東福寺、相国寺、円覚寺にて語録を講じ、安永五年(一七七六)には天竜寺二百二十一世に昇住した。晩年は地藏院に隠棲し、今日でも同院には若干の遺墨と墓石がのこされている。歿年は寛政六年(一七九四)で八十一歳であった。

若冲の絵の賛者には特に縁の深かった相国寺の大典蕉中を除くと、若冲自身、晩年には黄檗宗の石峰寺に身を寄せていたことからわかるように黄檗僧が多く、万福寺二十世の伯珣照皓、二十三世の蒲庵淨英をはじめとして、大槻幹郎氏によれば無染淨善、月船淨潭などの名が明らかにされている。臨濟僧では桂州道倫のほか同

じく天竜寺の翠巖承堅がいるが、桂州道倫は本図のほか、細見家の瓢箪図にも着賛しており、若冲との交際の度合が推し量られるが、残念ながら語録、詩文集がのこされていないため詳細は不明である。

なお、地藏院には、来日僧で黄檗十三世の竺庵浄印の書になる「来鳳軒」という額が現存しているが、桂州道倫はこの竺庵浄印に唐話を学んでいたことが、水田紀久氏の紹介になる雨森芳州文庫所蔵の桂州和尚の芳州宛書状により知られる。そして、この竺庵浄印が隠遁のために建てた寺が海宝寺であり、その方丈の一室には若冲の手になる群鶏図障壁画が現存しており、桂州和尚と若冲の関係もこのあたりから生じたと言えそうであるが、しかし、その障壁画は竺庵浄印歿後、三十年以上も経て後に描かれたものであり、そのことは証明し得ない。

(宮島新一)